

巻頭言

コメなき里

財団法人 いも類振興会

理事長 生天目 健 蔵

今では古い話だが、筆者の村から12キロほど北の山村に嫁入った2人の娘達が逃げ帰ってくるという珍事が発生した。

夕方になると、「お前は、今夜、夜業（よなべ）するか」と尋ね、「する」と答えると曲りなりにも、麦の入った夕飯ではあるが、それらしいものを食わせてくれるが、「しない」と答えると、一軒の家では、「それでは柿を食っておれ」と命令し、他の一人の嫁ぎ先では、「栗を食って我慢しろ」ということなので、「辛抱したら、明日が持たない」ということであった。

終戦近くの頃、東京の西銀座でコーヒー屋をやっていた知り合いが、ミカン箱一杯干し柿を手にしてきて、1個10円で売ったら、飛ぶように売れ、筆者も幾つか分けて貰った記憶がある。1個10円というが、今のカネに直せば、1個5千円くらいの価値である。当時の財閥の分家の一軒が疎開するに当たってトラック8台を調達し、そのうちの1台は干柿だった話もつたわっているから、柿も栗も、その利用方法によっては、一概に排斥はできないが、夕飯の代りということになると問題だと思いが、そういう暮らしをしていた部落もあったことは確かで、封建的な時代の嫁入る娘に、「夕飯に何を食わせてくれるか、調べないで結婚したのが間違いダ」と言ってもはじまらない。

今、コメの輸入化、関税化に伴って、コメ

の貸付け、生産が当然の如く主張されているが、根本から誤りであって、藩政時代でも自分のために稲作りをしたのではない。30万石、100万石という領主のために作付けしたのであって、従って米を作りながら、そのコメを食うことができないところに「水呑み百姓」なる憐れな存在がシンボライズされたのである。多くの農民は、米麦を作りながら、不作の際の年貢に備え、焼畑に蕎麦を作り、ヒエ、粟等を作って、難儀を免がれたのである。

これらコメのない里では、コメ1合ほどを油紙に包んで、囲炉裏の竹に吊しておき、病人が危篤に陥入ると、「今、白い御飯を炊いてやるぞ」というと、それで危篤の病人が直るという伝説があるという。

筆者は、別にコメを輸入するなども、関税化してはいけないとも主張するわけではないが、国際社会も、隣り組同士と同じで、村八分があってもいいわけではないし、一方交通で、支払い勘定だけでは、貿易が成り立たないのだから、大局から判断しないと、経済国交が断絶しかねない。農家も、国際的な立場を理解しないと、取り返ししのつかない結果を招くことを直視して、今の農家の権益が昔から存在していたように錯覚することは危険なことを理解して欲しい。

国際貿易も隣り近所の付き合いと同じで、一方だけが重荷では成り立たないことを大局から観なければならぬ。